

そして『人』を育てる家庭や学校から『物』を作る企業への橋渡し役として「物を作る『人』を育てる」役割を担ったのです。

○そのための取り組み

この十数年、障害者雇用が急速に広まったことは実感しています。とはいえ、彼らが社会で働くのは、決して簡単ではありません。

働く力はもちろん、体力や言葉使い、身だしなみなど、大人としての自覚が必要です。港第二では、それらを備えるための取り組みが用意されています。基本となる園内作業では、

- ①休まない・遅れない
- ②一日、同じ調子で作業をする
- ③指示に従う
- ④分からないことや失敗は報告する

という働く為の基本的なルールを設けています。これらは職種を問わず、私たち職員も含め『働く人』にとっては、ごく当たり前のルールです。そして、より細やかな個々の力を確認するために、二つの作業室に分かれます。

《まず始めに・・・》

一階の作業室では、単純反復作業（ボルトナットの組み立て等）を中心に、体力や生産性、集団の中で自分の果たす役割を考え行動することなどを学びます。



二階の作業室では集中力や器用さ、数の理解などを確認するため、多種多様な作業に取り組みます。



いずれの作業室でも、時に苦手な事へも挑戦しながら、それぞれで自身の得意不得意を把握し、長所を活かした就労を目指します。港

第二が厳しいといわれる所以は、このあたりにあるのかもしれませんが。

《社会への第一歩》

園内作業で力をつけた人たちは、より就労に近い雰囲気を経験を重ねるために、少人数のグループで施設近隣の企業の中に入り込み、半日ないし一日の体験実習に臨みます。職員は必ず同行しますが、現場はあくまでも会社です。常に職員がいるとは言え、施設の中ほど守られているわけではありません。時

に厳しい環境の中で、実習生たちは初めて『社会の中での自分』を意識し、たくましく成長していくのです。

《いざ、就労へ！》

港第二では就労担当の職員が、ハローワークと連携を取りながら、日々、新しい職場の開拓や面接の同行、企業内での職務分析等に奔走しています。どうすれば彼らが働ける環境になるのか。福祉と労働の尺度の違いをいかに埋めていくかが支援の焦点となります。そして、実際に就労に向けての実習が始まると、彼らと共に働き、企業と本人のパイプ役として汗を流し、彼らの居場所作りをするのです。

《最重要課題》

就労し、施設を出た後の支援は・・・保護者の方が最も心配されるのは、それに尽きるのではないのでしょうか？港第二における就労支援では、職場の紹介と同様に、就労している人たちを支えることも大切だと考えています。周囲の理解や職域の狭さなどの問題で、転職は容易ではありませんから、できるだけ同じ職場で長く働き続けられるような支援が必要になります。そのために、大阪市より委託を受けている『大阪市障害者就業・生活支援事業～西部地域就労支援センター』とも連携し、卒園生の就労先の訪問や、当事者や企業からの相談を受け続けています。開所から17年、その件数は年々増加の一途をたどっていますが、これからも、この姿勢は持ち続けたいと思っています。

○忘れてはいけないこと・・・

一方で、就労に結びつかなかった方や様々な理由により離職してしまった方へのアプローチも重要な支援です。港第二では、どうしても就労することが全てだと思われがちですが、決してそうではありません。就職しようと思うことが大切であり、その時に見せる力や身につく力、その過程で彼らが変わっていくことが私たちの求めるものなのです。卒後は、就労移行支援事業所や就労継続支援事業所などで、その力を存分に発揮し、自立に向けての取り組みを重ねていただきたいと思います。もちろん、離職してしまった方で再就職を望まれる方には、施設の再利用などの支援も行っています。

○これからの港第二

4月号でも触れましたように、港第二も来年度の新体系移行を視野に入れております。

